

## 幼稚園における障害幼児の集団適応の研究

### 【研究の目的】

幼稚園教育を通して、自閉的傾向の強い二人の障害幼児を各々のクラスの中で、いかに適応させたか、その場合の指導過程を事例分析する。第2に、障害幼児を受入れたことにより、健常児集団がどのように変化したかをとらえる。第3に、統合保育をすすめる上での改善点について整理する。第4に、障害幼児が適応していく上で、望ましいカリキュラムのあり方について検討する。第5に、幼稚園と治療機関の親密な連携について検討する。以上の5点にわたって、二年間の継続研究した内容

平岩 定法・赤塚 大樹  
斎藤 美代子・山口 延子  
小島 恵美代・伊藤 洋子  
加藤 道子

を紹介したい。

### 【研究の方法】

幼稚園教育における日常保育の指導過程を中心とした具体的事例の分析——保育者の実践記録を中心に——を共同討議し、問題点の分析、整理を試みる方法ですすめた。実践例は、昭和五十七年、五十八年度の二年間のものである。

### 【結果】

一、障害幼児の指導方法についての事例分析

昭和五十七年度の時、3才児であったF君と4才児のY君の二人の事例を中心とした。事例Iの3才男子F児は、ことばおくれ、独語、多動で、固執行動があり、視線のあわないう子であった。年少の一学期では、教師との関係づくりを重点におき、身体接触を心がけ、信頼関係をつくること、二学期は、他の子どもとの関係づけに注意した。三学期は行動と言葉を結びつける努力をした。

具体的技法としては、ひとつひとつ手をとって、ていねいに教える、遊びの中で面白さを体験させる、世話人グループをつくるなどの試みをした。

事例IIの4才男子Y児は、多動で文字、数字、アルファベットに興味があり、帽子に固執している。ひとりごとが多く、視線があわないう子であった。一学期は次の三点に心がけた。

①保育のそれぞれの活動のはじめには、必ず声をかけ、他児と同じ状態にするが、あとは目の届く範囲であれば、自由にする。

②黒板に文字、数字、アルファベットを書くというY児の常同行動を、無理に禁止しないで認める。

③良いこと、悪いことは、はっきりさせ、特に悪いこ

とは表情をかえ、大きな声で注意する。

具体的技法としては、散歩という活動を用い、教師と手をつなぐことから、他児と手をつなぐようにもっていった。また、Y児を気にかけてくれる健常児を中心にグループ編成した。Y児からの要求も、はじめは動作で示したが、言葉を教え、言わない限り要求には応じないようにした。

Y児が他児の名前を言えるころから、Y児ひとりの問題も、クラスの問題として話し合う機会を多く作った。その中で、友達に指示されて動くことがわかり、助けられながらも、当番の活動ができるようになる。

二学期では、教師から手ばなす努力をする。

①特別扱いせずに、子どもたちの中で育てる。②日に一度は、かかわりをもち、話をする。園内行事も、積極的に参加させ、集団行動の喜びも体験させた。こうした中から、Y児自身の自発的な意欲も出てくるようになった。

以上のポイントを基に、集団生活の枠を広げていった。Y児は健常児の中で大きく成長したが、土台のない集団へ入れるのは、むづかしく、健常児集団も、ある程

度できてからがよい。入園前に、小集団の経験があれば、より効果的である。

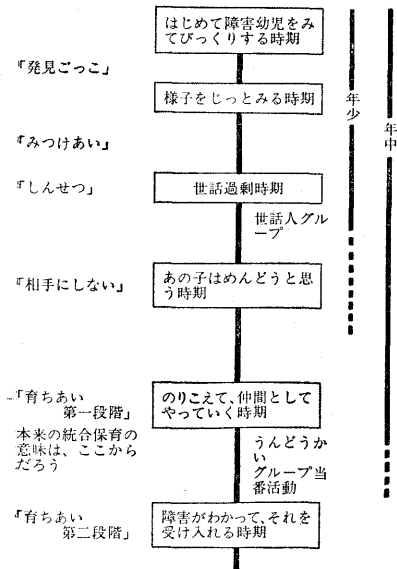
いずれにせよ、教師側が障害幼児を受け入れる寛大な姿勢をもち、常に子どもの情緒の安定に心がけ、保育することが大切である。確実な積重ねによる生活が基本であり、健常児集団の中で受ける色々な影響によって育つ力も大きい。

## 二、障害幼児の受け入れと健常児集団の変化

私たちが実践し、気づいたり、発見できたことを図1にしてみた。「発見ごっこ」では、障害幼児がクラスに入ったばかりで、彼のとっぴな動きに健常児がとまどうが、ひとつひとつの彼の動きを発見して、その成長を喜ぶようになっていく。「みつけあい」では、いい所をみつけるという気持、思いやりの眼が出てくる。彼は、はじめての友だちづきあいを始めるが、それは発達の遅い子からのようである。教師の試行で、いわゆるよくわかつている子、親切な子に、彼の面倒をみさせるが、ここで一定の生活ルールをつかんでいく様子があり、「世話係」の役目は大きい。

しかし世話過剰ともいえる「しんせつな時期」がすぎ

図1 障害幼児を受け入れる集団の変化



ると、彼を相手にしなくなる時期がみられる。これは健常児自身が、仲間と遊びたいという気持が強くなってくるせいでもある。

さて、「育ちあい第一段階」として「のりこえて仲間としてやっていく時期」と表したが、運動会のリレー等に見られた、彼をなんとかしなければ自分たちがおそくなり負けてしまうというギリギリの健常児集団の気持が出るようになったところで、彼との仲間意識が芽ばえてくると思われる。そして、教師が「みんなクラスの仲間

だ」と呼びかけ、障害幼児について話し合う機会を多くし、「ただの親切ではなく、彼が人間として、しっかり生活していけるようにするのに、今どうしたらいいの か」を問いかけることで、仲間として認め出していく。

こうした中で、障害幼児が健常児の「まね」ができるようになったら、しめたものである。この行動が、健常児たちを刺激し、苦勞しながらも、はげまし、教え、彼を育てようとする動きになってくる。そのことで、健常児自身が、自分や自分たちの事を復習し、整理できいき、ひとつの段階ごとに確実に身につけていくことになる。

ここで健常児集団の年令によって、障害幼児の受け入れ方をみると、図1の棒線で表したように、年令の小さいほど、全く同じように扱ってほしいと思っている。障害幼児に対する教師の集団の中での扱いは、「同じ」であって「同じ」でないことのむずかしさがある。また、「ことば」の壁の厚さを感じる。

Y児は三学期で人の話すことばの意味は、ほとんどつかめるが、子ども同士の対話はない。F児は、返事あいさつはでき、単語は言うが、その場にに応じて使えない。

「育ちあい第二段階」を發展研究していくとともに、私たちが行ってきている「手さぐり」が何らかの「すじみち」をみつけ出すことで、よりよい統合保育の展開がなされることを大きな希望としている。

### 三、統合保育をすすめる上での若干の問題

#### ①幼稚園における教師集団の受入れ体制

幼稚園全体で受入れを承認し、同時に担当者の個性的指導と全体指導を統一させていくことが大切である。

#### ③カリキュラムの有無

幼稚園で受入れ可能な障害幼児の場合、健常児集団の中でのばすカリキュラムで可能ではなからうか。

#### ③教師の指導体制の改善

障害幼児を一人受入れることは、教師の保育観、指導観を大きくゆさぶり、教師の自己革新を迫ることになる。

#### ④実践記録の書き方

障害幼児の微視的変化を見きわめる力量が要求される。そのためには、日常保育の中で、障害幼児の記録のみでなく、健常児の発達課題もふまえて記録をとっていくことが望ましい。

### ⑤ 自主研修による自己改革

日常保育を整理検討しながら、実践をすすめる必要がある。教師がよく自覚し、自主的な研究会をつくり、研究者もふくめた共同研究体制を創ることが、より一層、教師の発達にこたえることになる。従って、自主研修の場を保障することが必要である。

### ⑥ 幼稚園教育への専門職導入

障害幼児を受け入れ、成長させていくには、できれば、障害児教育を専攻した専門家を導入することが、より望ましい。

### ⑦ クラス人数と財政負担

健全児集団の中で伸ばすにしても、学級定数の適正化が必要である。その場合、人員確保のための財政負担の改善をどう行いうるかである。

### 四、障害幼児の集団適応を促すカリキュラムの検討

幼稚園における集団発達の過程において、障害幼児、健全児の関係をどうとらえていくべきか、について次の四つの視点で研究を進めた。

① 健全児カリキュラムの中で、障害幼児は、どのようなかわり方をしたのか、その過程を年間を通して見る

と同時に、最も顕著な場面を取り上げ、分析してカリキュラムと集団適応のあり方を整理する。

② 障害幼児の集団へのかかわり方の分析をし、集団適応の発達段階と指導方法について考える。

③ 保育者のかかわり方を分析する。

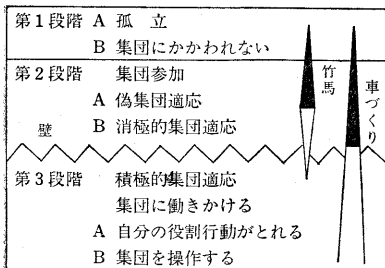
④ 附属幼稚園のカリキュラム全体について、その特徴をおさえ、望ましいカリキュラム、その基本について考える。

その結果、自閉的傾向をもつ幼児が、健全児集団の中でどのようにかわるのか、その過程を分析してみた。

### 図2は、集団適応の発達

段階を実践分析を通して、一つの仮説をつくってみた結果である。集団適応という場合は、本来的には、第三段階に入ることの意味し、第二から第三には、一つのりこえるべき壁がある。健全児はこの壁を簡単にのり

図2 集団適応の発達段階



こえているようだが、自閉的傾向の児は停滞する。幼稚園の集団に参加した時と重なった時と比較するならば、明らかに集団参加することが基礎となっている。従って、受入れ可能な幼児の場合には、受入れた方がよい。

次に、年長児の活動の中で、Yにとって成功した活動として「竹馬のり」の実践、難しい実践として「車づくり」を取り上げて分析、対比した。(図3参照)

竹馬のりの実践のポイントは、教師とYが活動内容、感情の両面にわたり相互に一致して、Yに感動と意欲を盛り上げさせたこと、一対一の対応が後半にかけて盛り上がり、指導も十分にできるようになった点である。

車づくりは、Yの発達をもう一步引き上げることが可能な活動であったが、教師の冷静な対応が、いくつかの活動でかかわりの可能性をひろいあげられなかった点にある。グループ人数も問題になるが、活動内容自体は、ダイナミックでかかわりの面が多くもてるものであり、悪くはない。

望ましいカリキュラムへの一つの提言として、

①保育者と幼児が一対一の対応ができれば、自己充

〔図3〕 事例分析 竹馬のりと車づくりの対比

	竹馬のり	車づくり
保育者と子ども	1対1	1対複数
目的(ねらい)	竹馬にのれること(単一)	車をつくり、のってあそぶ(複数の目的)
行動過程	1人でのれる	グループをつくり、複雑な作業過程を経過
道具	竹馬	カナヅチ、のこぎり、ドリル、クギ、板、キャスター
作業時間	約1ヶ月	約1ヶ月
保育者とのかかわり方	稀薄→濃厚	稀薄→観察
他の子どもとのかかわり方	応援	共同作業・つきはなし
集団	個人	2グループ一緒の12人
指導過程	全体→グループ→1人	グループ→グループ
本人の要求	竹馬にのりたいという意欲	複数の意欲(カナヅチをうちたい、ナンバーをうちたい、ペンキ等)
本人のかかわり方	十分なかかわり	要求のめこぼし(十分にかかわれなかった)
情動	満足=発達の向上	欲求不満=発達の停滞
保育者の姿勢	保育者の意欲が伝わる 保育者の意欲と感動がある 信頼の保育	保育者の意欲が十分伝わらない 保育者は冷静に観察している 観察の保育

実ができていること。

② 大きなダイナミックな活動は、集団とのかかわり場面を多く用意し、それぞれの子どもの要求に応えることができる。

③ 保育者の幼児理解への努力ときめこまやかな対応の三点を確認した。

### 五、幼稚園と治療機関の親密なる連携について

ここでは、第一に、自閉性障害児が幼稚園へ通いながら治療室にも通所する時、それぞれの機関の独自性と役割がかわり方について考察した。

#### (1) 治療室から幼稚園に入園する時期

私たちは、自閉性障害児が、次のような状態になっているのを一応の目安と考えている。

① 治療者と親密な人間関係が体験できるようになっていること  
② 親(母)——子関係が親密になっていること  
③ 友人(子ども)に対する興味、関心が芽ばえており、治療室の中で簡単な集団遊びに興味を持つようになっていくこと。

### (2) 両機関のめざすところの違い

#### 幼稚園

#### 治療室

● 発達観……「いが出てくる」という縦軸の発達観

(人間)関係での発達、かかわりの発達という発達観

● 実践の水準……ミクロに配慮しながら相対的にはマクロ水準での仕事(教育)

マクロを見ながら、ミクロ水準での仕事(心理療法)

● 評価の視点……集団活動に行動としてどのように参加出来る、課題へのとりくみ達成度はどうかをとらえる

心理構造、精神病理学的、いわば内面をとらえる

(3) 自閉性障害児が幼稚園で示す行動と治療室で示す行動

まず、入園前二年間治療室へ通所していた事例Yの場合について見てみよう。Yは入園直前頃に、治療室内では、ほぼ落着いておられる程度にまでなっており、また五〜六人の集団での「かごめかごめ」に関心を持ち、参加できる程度にまでなっていた。しかし、入園すると教室外へとび出しが多く、母親の付添いが必要な程度であり、「かごめかごめ」への導入は、全く不可能であった。入園直後は、治療室内で減少していた常同行動が増加し、たつぷりと常同行動をさせないと安定しない状態が続いた。しかし、二カ月程すると、Yは治療室、幼稚園の両方において、入園前の水準にまでもどった。これ

は、入園時の大集団状況、ストレスによる不安定さを慣れた場である治療室が支えた例とも言えよう。

次に、事例Fのように、治療室来所と入園が同時期の場合、治療室が幼稚園でのFの行動を支えるという関係には、なり得ていない。

#### (4) 二つの機関の連携のあり方

連携には、一般的に、①情報交換レベル、②症例検討会、研究会レベルの二つが考えられる。前述した両機関の独自性、違いを積極的な意味において理解し合い、障害児の成長発達を見つめ、支え、援助するためには、②のレベルにおける連携が望ましい。

#### (5) 親の指導

両機関の相互信頼が前提にあれば、一般的には、治療室において、母親カウンセリングの場を用意できることで、治療室が親の指導のリーダーシップをとることが望ましい。

中京女子大学 平岩 定法・赤塚 大樹  
同附属幼稚園 齊藤美代子・山口 延子  
小島恵美代・伊藤 洋子  
加藤 道子

☆新年おめでとうござい  
ます。講演記録を御寄稿  
下さいました三宅廉氏は  
『いのちを育くむ』（勁立  
社）の御著書によって、  
昨年度の日本私立幼稚園  
連合会賞を受賞された方  
です。なお、この賞には、  
いま二本該当者があり、  
本誌の発行責任者、本田  
和子も『異文化としての  
子ども』（紀伊国屋書店）  
によって、栄を授けられ  
ました。

☆本年は、〈子どもの作  
文〉を、適宜、掲載して  
いく予定しております。小  
学校の教師をしている友  
人から借り受けたもので  
すが、内容はもとより、  
子どもの字の書きぶりや  
イラストの、何と魅力に  
溢れていることではし  
ょう。子どもの進る表現力  
は、深い人間への信頼関  
係が基盤にあると言われ  
ますが、イヨーにおい  
ても、然りでした。（美）

### 幼児の教育 第八十三巻 第一号

一月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十八年十二月二十五日 印刷

昭和五十九年 一月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。